二〇一四年一月十七日　開催

映画字幕翻訳の世界と英語習得

戸田奈津子
（執筆＝林　美波*・川人　冴**）

■講演者……戸田奈津子（本学客員教授）
■司　会……桒原和生（本学英米語学科教授・主任）

勉強の方法と、キャリアについての質問が多かったとのことなので、本日はその二つを中心にお話しします。

まず、勉強方法について個人的な経験からお話しします。皆さんはもちろん英語をうまくなりたいと思っていると思いますが、それは日本人全員が一九四五年の太平洋戦争後から思っていることです。当時から国民はとても英語を話したがっていました。しかし、あれから七〇年も経つのに日本人はいまだに英語が下手です。なぜでしょうか。帰国子女のような特殊な場合を除き、日本に居て英語の勉強をしてもあまりうまくならない。もちろん文科省が悪いと言ってしまえばそれまでですが、責任転嫁をせず自分で良い方法を見つけなければなりません。

今では、皆さん英会話など勉強されていますし、今は小学生から英語を教えています。しかし小学生に英語を教えるというのは行き過ぎていると思います。英語より日本語を教えた方が良いと思います。なぜなら、何事でもそうですが、基本が大事だからです。英語をペラペラ話したいという願いは置いておいて、まずは基本をしっかりやることです。文法書を開き難しいことをやるのではなく、本当の基本、それが全ての根源です。

物事はなんでも基本が大切です。例えば、バレエダンサーは、舞台で素晴らしいパフォーマンスをしますが、毎日やっていることは、ほとんど基本のステップだそうです。毎日根気強く、ほとんどの時間を基本ステップの練習に費やしています。それが重要なのです。最初から踊れると思ったら大間違いです。やはり本当に地道に基礎を学ばなければいけないのです。

様々な分野で成功した人々は数多くいますが、基本が無駄だと言う人は一人もいません。語学もまさにそうです。基本

が大事です。中学三年の基本ができていれば、それですべての文章を作ることができます。後は、ボキャブラリーを増やすこと。英語は特に他の外国語と違って、フレーズがとても大変で、会話の中では難しい単語などは使われず、フレーズが多用されます。

よく、人が話したことをそのまま暗記しようとする人がいますが、そういう方法は、応用が利かないので絶対に良くないです。基本を元に、文章の作り方を覚えなければ、暗記した文章を入れ替えようとしても応用がききません。単なる暗記は、とても貧しい英語の勉強の仕方です。小学生の英語教育では、先生が言ったことをただ暗記するだけで応用はできません。人間はオウムではなく、頭脳があるのですから、頭脳を使ってしっかりと文章を組み立てていかなければ進歩がないので

講演する戸田先生

す。文章がどうできているのか、しっかり理屈を覚える。そしてその後は、実際に会話をして慣れることです。会話は、本を買ってきて覚えるのではなく、実際にやらないとできるようにはなりません。ただ、その前に、ある程度基本を頭に入れておき、しかもボキャブラリーが豊富である事が大事です。

先ほど言ったイディオムですが、日本人はすぐに辞書を調べて難しい単語を覚えようとします。例えば、男の人が女の人を見て、あの人イカすなあと、少々お下品な言葉を使いますが「彼女を見るとムラムラする」と表現したい場合、日本人はすぐに辞書で調べて、“She excites me sexually.”などと訳しますが、そんな風には言いません。英語でなんと言うかというと、“She turns me on.”これだけです。turn も on も良く出てくる簡単な言葉ですが、この二つが組み合わさると「興奮する」という意味になります。英語はこういうものが非常に多いです。ただ、こういったことは学校の教科書にはあまり書いてありません。でも実際に人と話して、生きた英語を勉強すれば、英語はうまくなります。まずは英語の基礎、その後、英語での会話、これが英語上達の良い順番だと思います。とにかく基礎が何より重要だということです。

私の時代は今と違って、周りに英語で書かれたものがなく、私は中学生で初めて英語を見ました。その時にはすでに映画

が好きでした。それが私のスタートラインです。映画を好きになったのは小学生の時です。本当に好きなものには憧れますよね。憧れる、好きだということは全部それを知りたいと思うことで、それが自発的に勉強しようと気持ちを生みます。私の場合、それが映画でした。何をしゃべっているのかを知りたい、それが、私が英語を勉強するモチベーションでした。やはり何かを勉強するときにはモチベーションがなければだめです。例えばフランスに行きたいからフランス語を勉強しようと思ってもそれでは弱いです。やはりもっと大きなモチベーションが必要だと思います。何か大きなモチベーションがなければ何事も進歩しません。

私が与えられた学校の教科書はとても退屈でした。面白いと感じる教科書などは見たことがありませんが、今は様々な端末がありますから、自分から面白いものを見つければいいですし、自分が好きなことなら苦にならないから、そういったものを見つけ、自分を楽しませる工夫をすればいいのです。待っていてもだめです。今の学生たちは皆受け身だと思います。誰かがくれるだろうと思っている。それではだめだから、自分から進んでチャレンジすることが大事です。道具は揃っているのだから、どんな小さなことでも少しでも興味のあることを切り口に始めていけばいいのです。私が英語をできるようになったのは映画があったからで、英語の力は全てボーナスです。映画が好きなだけで、おまけで英語がついてきました。私は大学時代の半分は映画館で過ごしたくらいです。映画は楽しいだけでなく、人生の教訓など様々なことを学べますし、良い教材にもなるので是非活用してほしいです。

よく「留学は必要ですか？」と聞かれますが、何かをするのにこれが必要かと聞くマニュアル的な考え方はだめです。人生はマニュアルではなく、アドベンチャーが面白いのです。全ては自分のやる気次第です。私は、留学などしたこともなく、自分の好きなものを勉強して実力をつけていきました。三〇歳過ぎまで私は英語を話したことがありませんでしたが、字幕をやるためにある日突然通訳の仕事を任されて、英語も話せないのにやってみようと思って必死になってやりました。人と別のことをやる方が、チャンスがあります。外国人と異なり、日本人は人と同じことをしようとしがちです。しかし、個性を出して人に笑われてもいいから、勇気を持って自己主張をするべきです。外国人はとても自己主張が強いですから、グローバル社会のいま、自己主張をしないと負けてしまいます。

語学の勉強も必要ですが、日本語の本も読んで下さい。今の若い人たちは本を読んでいる人が少ないと思います。私に人生の大事なことを教えてくれたのは、もちろん映画もそうですが、一番は本でした。映画は楽しくて、見ているだけの

受け身でいいですが、本は活字しかなく、自分で考えなければいけません。通訳、翻訳において英語ができることは当たり前で、そのうえで評価されるのは日本語力、日本語の表現力です。それを養うのが本なのです。良い文章の本をたくさん読んでください。私の時代は本しかなかったので、子供の頃からたくさんの本を読みあさり、そこで日本語力を養いました。そういった日本語力がなければ通訳や翻訳はできません。日本人なのだから、たくさん日本語を読み、書かなければいけません。字幕をやりたいという方に二、三ページ訳をお願いしても、まず皆さん日本語が書けない、これは日本人として恥ずかしいことだと思います。

これに関連して、この大学でも字幕をやりたいという方は多いと伺っていますが、字幕は今や廃れつつある仕事です。現在、シネコンでは字幕・吹き替え両方で上映しますが、若い方は皆、吹き替えを好まれます。今は字幕・吹き替え五分五分の割合ですけれども、そのうち八対二になるでしょう。しかし字幕が決してなくならないのは、字幕の方が、予算が少なくて済むからです。字幕は一人の翻訳者に依頼すればいいですが、吹き替えはアテレコをするために人数が必要です。そのため字幕は安い予算の映画に、吹き替えは大作ということになります。滅び行く仕事だとわかっていても字幕をしたいという方は結構ですが、変動が激しい今の世の中、先を見る視点を持つ事は大切です。今ある職業が十年後にあるか不確かなこのご時世に、自分のしたい職業に一生をかける価値があるのかを見極める必要があります。かつて字幕も一枚一枚手書きで原稿を作っていた時代がありまして、その原稿を書く仕事がありました。私は「書き屋さん」と呼んでいたのですが、その書き屋さん、パソコンがこの世に出たら一夜にして失職しました。私たちはそういう世の中に生きているのです。

キャリアの話に入ったので、一つだけ人生の先輩として申し上げたいのは、世の中は決して甘くないということです。最近不景気で就職難だと騒がれていますが、世の中は二〇年前も十年前も、いつでも就職難です。自分が本当に望む仕事に就くことはいつでも難しい。だからよっぽど覚悟しないと挫折します。私の場合も、今の職業を手に入れるのは大変でした。字幕だけで食べている人なんて十人しかいない厳しい世界です。大学卒業をしたらすぐに仕事ができるわけもなく、映画字幕をするのに二〇年間、枠が空くのを待っていました。四〇歳になって初めてやりたい仕事に就き夢を叶えることができましたが、逆に一生夢が叶わないで終わるという可能性もあります。

夢は、持っていれば叶うという考えは大変危険です。持っていれば夢が叶うのならば一生願っていればいいわけで、一

生できないかもしれないということを覚悟しないと夢は達成できません。先ほど日本人は自己主張ができないと申し上げましたが、もう一つの日本人の特徴は、人に甘えることです。海外の人、特に映画業界の人を見ていると、彼らは決して人に甘えず、自分の実力で勝負します。誰にも頼れないとわかっているのです。そういった徹底したProfessionalismが日本人には欠けているのではないでしょうか。国際社会は甘くは接してくれません。今の国際社会で認められるには、人が何とかしてくれると思わず、全て自分の責任で、自分で決定して、自分のベストを尽くすことが必要です。

質疑応答

英米語学科一年生男子

質問　スポーツと英語が大好きで二週間後に冬オリンピックの通訳ボランティアをすることになりました。自分にとってのスポーツ選手は戸田さんにとってスターのようなもので、彼らを前にしたら上がってしまうと思うのですが、通訳者としての心構えを教えていただきたいです。

答え　私が通訳を始めた当初、とんでもないスターを前に舞い上がってしまうし、周りが大変に脅かすものですから大変でした。ロバート・デニーロという有名な俳優がいますが、彼の今までの強烈な役どころから、きっと気難しい方に違いないと周りからは脅かされていましたが、いざ会ってみると、実はとても優しい方だったという経験があります。そこから言えるのは、まず通訳は先入観を持ってはいけないということです。ブラッド・ピットだって初めて会うときはなんていい男だろうと思いますが、十分一緒にいてごらんなさい。彼も普通の男です。彼らを決して見上げず、自分の視線で見ることです。また、自分をよく見せたり卑下したりせず、ありのままの自分で相手に向かい、精一杯相手の話を聞くことです。そうすると相手は自分を受け入れてくれます。これは何十年間、多くの人と会う上で常に私が思うことです。

* 林　美波　英米語学科四年
** 川人　冴　英米語学科四年

会場風景

戸田先生を囲んで